

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730644

研究課題名(和文) 体育科における「教師のプロ意識」調査票の開発に関する実証的研究

研究課題名(英文) Empirical research on the development of "professionalism of teachers" questionnaire in Physical Education

研究代表者

厚東 芳樹 (koto, yoshiki)

北海道大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：80515479

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、体育分野で卓越した教師と言われる方々のプロ意識を導出すること、導出したプロ意識を実際の体育授業場面で表現するためにはどうすればいいのかを優れた教師(態度得点の高い教師)を対象に、実証的に検証すること、導出したプロ意識の伝達可能性を文献学的に検討することの3点を研究課題として取り組んだ。

その結果、優れた教師に共通した意識として、子どもを探る「子ども理解」に関わったプロ意識の高いことを導出した。また、こうしたプロ意識を学ぶステップとして、まずは「見ること」、次に「観ること」が教師のキャリア発達のステージであることが明らかになってきた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to derive the professionalism with the excellent physical education teacher. In addition, excellent teachers, it was also intended to be verified whether exerts how the professionalism in physical education classes. As a result, excellent teacher was derived that high professionalism that was involved in the "Children's understanding".

研究分野：教師教育

キーワード：小学校体育授業 優れた教師 キャリア発達 プロ意識 子ども理解

## 1. 研究開始当初の背景

一般に、キャリア発達の様相は、一様でない。なぜなら、いろいろな職業があり、いろいろな人間があり、いろいろな環境があるからである。また、「人間」の要因に限定しても、一人ひとりで生き方が様々に異なっている。このような現状の中にあっても、「優れた実践者」は存在している。それ故、「優れた実践者」へと導くキャリア教育は必要である。本研究は、優れた教師がいかにしてプロ意識を獲得してきたのか明らかにしようとするものである。ここには、「同じ経験をして、成長する人とそうでない人がいる」とする現象を教師のキャリア発達の側面から追求してみようとする動機がある。

これまで、誰もが学習成果の高い教師(以下、優れた教師と称す)になりたいという願いから、優れた教師が有する知識や技術を明らかにしようとする Teaching Expertise 研究がアメリカを中心に押し進められてきた(論文番号4)。とりわけ、優れた教師の「技術的実践」に関しては、行動科学の発達に伴って「プロセス プロダクト」研究法を用いた「授業の科学」が飛躍的に進歩し、学習成果を高める指導プログラムや指導技術がある程度まで解明されてきた。その一方で、マサチューセッツ工科大学の Schon (1983) が、「技術的実践」の優れた専門家は「省察(reflection)」も優れていたことを導出したことは周知の通りである。

この Schon の研究を契機に、国内外を問わず、教師教育界においても「反省的实践」を主軸とする研究が事例的に展開されるようになった。とりわけ、アメリカの Teaching Expertise 研究においては、優れた教師を対象に彼らの省察研究が数多く展開されてきた。それに関わらず、未だ、山積する学校教育問題(子どもの側では、いじめと不登校、学力の二極化、学級崩壊などがある。一方、教師の側では、「不適格教員」の増加がある)の解決が図れないでいる。このことについて、これまでの教師教育界の一連の研究は、優れた教師にみる知識や技術、省察の仕方の導出に留まり、なぜ優れた教師が学習成果の高い授業を展開できるようになったのかという教師の成長過程について検討してきていなかった。

ここで、これまでの教師教育に関わる研究の中で、教職経験年数の高いベテラン教師であっても学習成果をほとんど高めることができない教師が認められてきた(論文番号1)。こうした事実は、単なる時を経るだけでは優れた教師へと成長できず、「経験から学習する姿勢=プロ意識」が重要であることを示している。逆に言えば、優れた教師が学習成果の高い授業を展開できるようになった背景には、

「経験から学習する姿勢=プロ意識」の向上があったものと考えられる。

そこで本研究では、教師のキャリア発達研究に関する先行研究の批判的検討から、プロ意識を構成するといわれる「自己概念」「専門技能」「他者認知」(トンプソン, 1971) それぞれを問うた「教師のプロ意識」調査票を開発し、その調査票の有効性を実際の学校教育現場の授業を対象に実証していくことを目指した。合わせて、特段に優れた教師(恒常的に学習成果の高い教師)は、プロ意識をどのように高めてきたのか質的研究法より事例的に検討していく計画を立てた。

## 2. 研究の目的

これまで筆者は、小学校教師 232 名を対象に、教職経験年数という物理的条件が体育授業における学習成果(態度得点)に及ぼす影響を検討した。その結果、経験年数の向上に伴って態度得点も漸増した群と、逆に得点が逡減した群とが存在していた。また筆者は、学習成果(態度得点と運動技能)を高めた優れた教師とそうでない教師、経験年数の高い教師と若手教師とをそれぞれ対象に、体育授業中の「出来事への気づき(予兆)」とその手立ての相違を検討した。その結果、優れた教師の方がそうでない教師よりも「出来事への気づき(予兆)」の頻度数が有意に多く、教材との間に生じる子どもの技能的なつまずき手だての知識を豊かに有していたことが認められた。しかし一方で、教職経験年数でみると、若手教師の方が経験年数の高い教師よりも「出来事への気づき(予兆)」が多く、学習成果も有意に向上した結果にあった。これらより、専門職であるプロの教師として成長していくためには、多種多様な「出来事」との出会いと乗り越えが重要であるものと考えられた。それでは、どうすれば「出来事」に気づき、対応できるようになっていくのだろうか。もっと言えば、同様の出来事が生じたとき、なぜ気づける教師とそうでない教師とが存在するのであろうか。

筆者は、ここに「経験から学習する姿勢=プロ意識」が強く関係しているものと仮説し、こうしたプロ意識が教師の成長過程に大きく影響を及ぼしているものと予想した。

そこで本研究では、体育科における「教師のプロ意識」を調査し、卓越した実践者たちの有したプロ意識は伝達可能なのかを学校現場の授業を対象に検討することとした。具体的には、教師のプロ意識を「自己概念」「専門技能」「他者認知」(トンプソン, 1971) それぞれの要素より測定・評価する方法の作成を目指した。

ところが、研究を推進していくプロセスの中で「他者認知」と「専門技能」とが必ずしも一致しないことが明らかになってきた。こ

れより、教師のプロ意識を測定することの意義は低いものと判断した。そこで本研究では、体育科における「教師のプロ意識」を調査し、その伝達可能性を学校現場の授業を対象に実証することとした。そのため、次の3つの研究課題を実施した。すなわち、

- (1) 「教師のプロ意識」を文献学的検討より調査する
  - (2) 優れた教師(恒常的に学習成果の高い教師)がどのようにしてプロ意識を高めてきたのか事例的に調査する
  - (3) 導出した「教師のプロ意識」の伝達可能性を、実際の小学校教師を対象に事例的に検討する
- の計3点である。

### 3. 研究の方法

研究課題1は、以下の通りであった。目的は、斎藤喜博氏や高田典衛氏など卓越した体育教師の著書を中心に文献学的に検討し、卓越した教師のプロ意識を導出することを目的とした。また、導出したプロ意識について、どうすればこうしたプロ意識が習得可能なかを検討し、本研究の後半部の研究課題導出に努めた。

研究課題2は、以下の通りであった。目的は、恒常的に学習成果(態度得点、運動技能)の高い教師3名を対象に、(1)再生刺激法によるインタビュー、(2)体育授業中の出来事への気づきと教師行動観察法、(3)授業実践後の「ジャーナル(授業日誌)」の記述、の3点からの分析(3点分析法)を実施することで、彼らの「プロ意識」とその成長過程を事例的に導出することを目的とした。

調査の対象は、秋田県下と北海道下の小学校教師3名を対象に調査を実施した。各調査対象者には、自らの授業実践で経験した成長の手がかりとなるような出来事を再生刺激法によるインタビューより導出しつつ、彼らがどのように「プロ意識」を向上させてきたのか明らかにする。このとき、彼らのような「プロ意識」を初任教师やその他の教師に伝達する行動様式として、どのような成長過程を踏めばいいのか事例的に導出した。また、各教師には、小学校教師が最も苦手意識をもっている授業単元(短距離走、水泳:永島,1974)を実施してもらい、そこでの「出来事への気づき」「教師行動観察法」および「授業日誌」の記述内容とインタビューで導出した彼らの成長過程のあり方が認められるのかを事例的に分析することで、優れた教師のもつ「プロ意識」の深まり方と広がり方を検討した。

研究課題3は、以下の通りであった。初任教师を対象に、優れた教師のもつプロ意識の伝達可能性を検討した。具体的には、初任教师1名を対象に、子どもを「見る」行為に関わった教師行動と取り扱う運動教材に関わった「運動の知識」とそこで生起する可能性の

ある「子どものつまずきに関する知識」に介入することで、優れた教師のもつプロ意識の伝達可能性を検討した。調査の対象は、北海道下の小学校初任教师1名を対象に調査を実施した。

### 4. 研究成果

研究課題1「我が国の優れた教師の「プロ意識」の成長過程に関する文献学的検討」は、以下の通りであった。

斎藤喜博氏や高田典衛氏など卓越した体育教師の著書を中心に文献学的に検討した結果、優れた教師に共通した意識として子どもを探る「子ども理解」に関わったプロ意識の高いことを導出した。また、こうしたプロ意識を学ぶステップとして、まずは「見ること」、次に「観ること」と「診ること」が重要になってくることが明らかになってきた。

現在、小学校教育現場では「運動を知らない教師」がほとんどであると言われている。こうした現状は、子どもたちの真正な願い(上手になりたい)を沈殿化させてしまうものであり、「子ども理解」とは程遠い教師行動である。もっと言えば、教師としてのプロ意識が顕著に低下している可能性は否定できない。教師としてキャリア発達し優れた教師へと成長していくためには、まずは子どもを見て、見えていなかったものが見えるようになること、次に子どもたちの真正な願い(上手になりたい)を達成できるだけの実践的指導力の形成が重要になってくること、研究課題1より明らかになってきた。

研究課題2「優れた教師の「プロ意識」の成長過程に関する事例研究」は、以下の通りであった。

優れた教師に共通した意識として、子どもを探る「子ども理解」に関わったプロ意識の形成が重要であることがインタビューより導出できた。具体的には、プロ意識の形成過程として、まずは物理的に子どもを「見る」時間をより多くする行動を意識すること、次の段階として子どもの授業中の運動動作を「観る」ことで、その運動の良し悪しを判断すること、そして、間違った動作やまずい動作を「観る」ことが可能になってきたら、これらを解決・解消し子どもの運動技能を高める行為である「診る」行動が展開できること、という成長過程の重要性が明らかになってきた。

その後、優れて教師の経験知として導出した成長過程のあり方の妥当性を検討するために、実際の授業実践の場を対象に調査した結果、いずれの教師も共通して「運動の知識」と「子どものつまずきの類型と対処法に関する知識」を豊富に獲得し、その知識を中核に授業中の「出来事の予兆」に気づいていたことが認められた。これらより、総じて優れた教師になるためには、「観る-診る」行為が出来るための成長過程を経ることが重要である

ものと考えられた。

上記の結果は、先の研究課題1で導出した卓越した教師たちの経験知とも一致する結果であった。

研究課題3「体育授業における教師のプロ意識の伝達可能性に関する研究」は、以下の2点であった。1点目は、子どもを「見る」行為については、介入前後の子ども全体を見ていない時間の検討より、大幅に改善する結果が認められ、物理的に「見る」行動は初任教師であっても意識させることは可能であるものと考えられた。2点目は、教師の相互作用行動およびその言葉かけの内容分析より、「観る」とことと「診る」とことについては、介入前後で大きな変化は認められなかった。これより、短時間の介入で上記2つを意識させた上で、教師行動として表現することは困難であるものと考えられた。ただし、意識させることは、参与観察より認められた。

今回導出した優れた教師のプロ意識、また優れた教師になるための成長過程のあり方は、今後の教師のキャリア発達研究を下支える内容に成り得る可能性は十分にあるものとする。

今後研究課題としては、優れた教師に共通して認められたプロ意識について、どうすればその他の教師にもこれらの意識を持たせることが可能なのか、「観る」行為と「診る」行為を可能にするためにはどうすればいいのか、それぞれ検討する必要がある。これらの検討が進むことで、優れた教師へと導くキャリア発達研究が大きく推進できるものとする。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

厚東芳樹, 体育嫌い・運動嫌いに関する基礎的研究, 体育教育研究, 査読無, 第3号, 2014, 44-53

厚東芳樹, 体育授業における「戦術的気づき」を高める運動教材の開発過程に関する研究 - 小学校4年生: フラッグフットボールを題材に -, 北海道体育学研究, 査読有, 第48巻, 2013, 55-66

厚東芳樹, 女性教師のキャリア発達に関する研究 - 小学校体育授業にみる指導力について -, 北海道体育教育研究, 査読無, 第1号, 2012, 10-21

厚東芳樹, 成功体験と体育授業に対する愛好度の低い子どもの学習行動との関係 - 小学校2年生を対象として -, 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 査読無, 第118号, 2012, 121-133

〔学会発表〕(計1件)

厚東芳樹, 小学校体育授業における初任教師の相互作用行動に関する事例研究 - 教材内容と子どもの複合的知識への介入の効

果 -, 日本教育方法学会第50回大会, 2014, 広島大学(広島県東広島市)

〔図書〕(計2件)

厚東芳樹, V2 ソリューション出版, 卓越した教師のプロ意識 - 授業学の夜明け -, 2015, 142

厚東芳樹, V2 ソリューション出版, プロフェッショナルな教師の体育授業をみる観点は何が違うのか, 2014, 176

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

厚東 芳樹 (KOTO Yoshiki)

北海道大学・大学院教育学研究科・准教授  
研究者番号: 80515479

(2) 研究分担者

( )

研究者番号:

(3) 連携研究者

( )

研究者番号: